慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日系アメリカ人の適応に関する一考察 :「成功物語」再考
Sub Title	The adaptation of Japanese Americans : reconsideration of their success story
Author	本多, 千恵(Honda, Chie)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1991
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.31 (1991.) ,p.9- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000031-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日系アメリカ人の適応に関する一考察

——「成功物語」再考——

The Adaptation of Japanese Americans

—Reconsideration of Their Success Story—

本　多　千　恵
Chie Honda

Although a long history of discrimination and prejudice against Japanese Americans during which they were viewed as an "unassimilable" problem minority by the larger society, the Japanese Americans were subsequently declared to be a "successful" model minority. This "success" attracted not only social attention but also academic interest in the adaptation of Japanese Americans. In this paper, I will examine theories which has been applied to the case of Japanese Americans, that is, "assimilation theory," "theory of generation," and "midleman minority theory." Although these perspectives are suggestive, they provide only incomplete picutres of the adaptation of Japanese Americans. I argue that all these theories fail to incorporate an infuluential factor, "strategy," into their frameworks. In order to fully understand the adaptation of Japanese Americans, I will develop a framework consisting of "context," "ethnicity" and "strategy," which influence each other. In terms of this framework, the adaptation of Japanese Americans will be historically reinterpreted.

1. は じ め に

第二次世界大戦前のアメリカ社会において「帰化不能外国人」,「敵国人」として，法的，経済的，社会的な差別や偏見を甘受してきた日系アメリカ人は，戦後一転して，「モデル・マイノリティ」としてアメリカ社会の賞賛の的となり，「日系アメリカ人成功物語」の神話が生まれた。アメリカ社会において，この日系アメリカ人の「成功」は，マス・メディアに取り上げられる等の大きな反響を呼んだだけでなく，社会科学においても研究の対象とされ，その適応をめぐって様々な分析が行われてきた。

本論では，日系アメリカ人の適応に用いられた人種・エスニック理論であり，日系アメリカ人の分析枠組を考えていく上で有意であると考えられる同化理論，世代理論，ミドルマン・マイノリティ理論のそれぞれの視点を概括し，これらの検討を踏まえた上で，日系アメリカ人の適応を説明する分析枠組を提示し，それに基づいて歴史的に日系アメリカ人の適応のプロセスの再解釈を試みたい。

2. 日系アメリカ人の適応をめぐる理論

これまで日系アメリカ人の適応をめぐって，文化および第一次的構造（微視的な人間関係等）を重視する同化理論の視点，「世代」ごとの適応を考察した世代理論の視点，および第二次的構造（巨視的な経済構造等）に重点を置くミドルマン・マイノリティ理論の視点から議論がなされてきた。これらの視点は日系人の適応を考える上で有意であると思われるので，以下で各々について検討を加えたい。

1) 同化理論の視点

同化理論はシカゴ学派のR・パークをその創始者とし，M・ゴードンによって体系化された。パークは「人種関係循環」理論を提示し，移民の適応は「接触（con-

tact)」→「競合 (competition)」→「応化 (acommodation)」→「最終的な同化 (eventual assimilation)」という過程を経ると主張している。この過程は不可逆的で継続的なものとして捉えられている[1]。さらに，パークは同化に影響を与える要因として，「移民の文化とコア社会の文化の類似度」や「マジョリティの偏見」[2]，「ホスト集団の第一次的関係に包含されている程度」[3]，「可視性，隔離性」[4]等をあげているが，これらを体系的なモデルにするには至らなかった。

M. ゴードンは，パークの「同化」概念を基本的に引き継ぎ，「同化」の体系的な分析枠組，「同化変数」を提示している[5]。移民の適応を「同化過程」として捉え，7 つの同化の段階に分類している。すなわち，それらの同化の段階とは，「文化的及び行動的同化 (cultural and behavioral assimilation)，「構造的同化」(structural assimilation)，「婚姻的同化」(marital assimilation)，態度受容的同化 (attitude receptional assimilation)，「自己同定的同化」(identificational assimilation) 行動受容的同化 (behavioral receptional assimilation)，公民的同化 (civic assimilation) である。ゴードンによれば，文化変容は必ずしも他の同化過程につながらず，構造的同化が全ての同化過程の鍵を握っている。構造的同化が進めば，婚姻的同化へと移行し，婚姻的同化が進むにつれてエスニック・グループとコア社会との境界が消失し，自己同定的同化につながる。そして，それによって態度受容的同化および行動受容的同化の過程が生じ，最終的に公民的同化の状態に達するとしている。また，構造的な隔離は文化変容を含めた他の同化過程を遅滞させることも指摘している。ここでの「構造的同化」は微視的な「構造」に関するもので，具体的には移民がホスト社会の社交クラブや組織及び公的組織へ参加し，コア社会の成員と一次的な関係をもつようになることを指している。そのため，ゴードンの分析枠組は巨視的な，第二次的構造を十分に考慮していないという批判は免れないであろう。しかしながら，ゴードンが，アメリカのエスニック・集団の現状を「文化変容」と「構造的多元化」として特徴づけている点は重要である。

同化理論の視点は，「同化」概念自体が民族中心主義的なアングロ同調 (Anglo-conformaity) を前提としているとの批判を受けてきた。しかし，筆者は同化理論の主たる問題点は，むしろ，エテニシティの表出的な側面が強調されている点，適応が文化的には WASP 文化に近づき，構造的にはコア社会に組み込まれていく，一方向的で漸進的な現象として捉えられている点にあると考える。

2)「世代理論」の視点

「世代理論」はエスニック集団全体としてではなく，「世代」という分析概念を用いて適応の問題を捉えている。この理論の前提となっているのは，エスニック集団の成員の帰属意識は全体としてのエスニック集団に対してのみならず，社会的，歴史的過程の中で同じ位置づけをもつ「世代」に対しても向けられるということである。また，世代の共有は，ある特定の経験，思考や経験の形態，歴史的な行為の特徴的な型を共有することを意味しており，移民の適応の分析において，重要な概念の一つとなっている[6]。M. ハンセンによって主張されている世代理論は，移民の民族文化は世代が進むごとに消失するのではなく，三世においてその復興の兆候がみられるという議論を展開している。一世は祖国の民族文化を当然のものとして親しむが，二世になると，そのアイデンティティの不安定さゆえに，そのほとんどが民族文化を忘れてコア社会の文化に同化しようとする。しかし，アメリカ生まれの両親を持ち，アメリカ人としての安定したアイデンティティを持つ三世に至って，二世が忘れ去ろうとした民族文化を復興する動きがみられるというのである[7]。

この理論の特徴は，同化理論が移民の民族文化の変容を一方向的なものと捉えていたのに対し，移民の文化的適応においては三世に至って民族文化に立ち戻るという動きが見られることを指摘した点である。

3) ミドルマン・マイノリティ理論の視点

ミドルマン・マイノリティ理論は，E. ボナキッチと J. モディルによって精緻化された。この理論は，アメリカの歴史（特に経済史）のなかで，ある種のエスニック集団は支配者集団と被支配者集団の間に組み込まれ，スケープ・ゴートとしての役割を果してきたことによって適応が方向づけられてきたと考え，エスニシティの手段的な連帯という側面を強調している。ボナキッチとモディルは，このミドルマン・マイノリティの主要な特徴として，そのマイノリティの「エスニックな連帯」(エスニック集団の社会的な特徴)，エスニックな連帯を基盤とした「小規模なビジネスへの集中」(エスニック集団の経済的な特徴)，「社会的敵意」(コア社会の反応の特徴) をあげ，これらの要素が相互に関連していることを指摘している。

ボナキッチとモディルはこのようなミドルマン・マイノリティの理論として，「コンテクスト理論」，「文化的理論」，「状況理論」を取り上げ，ミドルマン・マイノリ

ティ現象を説明しようとしている。「コンテクスト理論」は，この現象をミドルマン・マイノリティが存在する社会（伝統的社会，ステイタス・ギャップのある社会）の特徴として捉えている。「文化的理論」は，ミドルマン・マイノリティ現象の説明をマイノリティのもつ文化的な特徴（プロテスタントの倫理に類似した価値や，強固なエスニックな連帯）に求めるものである。「状況理論」はミドルマン・マイノリティ現象を歴史的状況の構造，すなわち，マイノリティの置かれていた「ストレンジャー」や「滞在者」という状況によって説明しようとするものである[8]。

ボナキッチとモデイルのミドルマン・マイノリティ理論は，コア社会の歴史的，経済的構造をその分析枠組のなかに取り入れ，また，ミドルマン・マイノリティの特徴が相互に関連していることを指摘している点については高く評価すべきであろう。しかし，経済的な利害を中心に捉え，エスニシティの政治的な，社会的な基盤を十分に考慮していない点は批判されよう。さらに，人種的な可視性もコア社会の反応に影響を与えるものとして考慮する必要があるであろう[9]。

3. 同化理論，世代理論，ミドルマン・マイノリティ理論の日系人研究への適用の批判的検討

日系アメリカ人の適応に関する研究の多くは，同化理論の視点に依拠し，現在の日系アメリカ人の適応状況（＝成功）の説明において日本文化，特に日本的価値を強調し，日本文化と WASP に代表されるアメリカ中流階級の文化との類似性あるいは日本文化のもつ機能性にその論拠を求めている。

パークは「最終的な同化」を前提としていたためか，日系アメリカ人の社会適応に対してもきわめて楽観的であった。彼は「日系移民の強い同化志向」，「効率的な組織」，「応化された，適合的な行動」[10]，あるいは「日系アメリカ人二世が時に『アメリカ精神』と呼ばれるものに染まっていること」[11] 等をあげ，当時の排日運動も単なる一過性の問題であり，最終的な同化によって解消されると考えていた[12]。他方で，パークは日系人の「肉体的な特徴」が同化への主な妨げになっていることを指摘している。問題なのは日本人の精神ではなく，肌であり，その肌の色こそが「黄禍」という脅威の象徴となっていると述べている[13]。しかし，パークはこのような問題をもつエスニック集団にも人種関係循環モデルが適用できると考えていたのである。

W. ピーターセンは，R. ベラの「Tokugawa Religion」に言及し，「日本的価値である勤勉，節約，親孝行は西洋文化でいうところの『プロテスタント倫理』と類似している」と主張し，このような価値もふくめて日本の文化的な遺産が他のマイノリティ集団が達成できなかった「成功」をもたらしたとしている[14]。さらに，後の著作においては，文化的多元論の視点から日系アメリカ人の適応を捉えている。ピーターセンは全ての成員がほぼ自動的に一体化する自意識的連帯集団としての「サブネーション (subnation)」概念を提示し，日系人の「成功」をこのサブネーションに帰している。ピーターセンは日系アメリカ人が祖国日本に高い誇りを持ち，強いエスニックな連帯を維持していたことが，逆にアメリカのコア社会に適応し，その文化変容が促進されることにつながったと主張している。彼は，また，日系アメリカ人の適応の現状を「公的役割における文化変容と私的役割における文化的多元化，公的領域における第二次構造的同化と私的領域における第一次構造的多元化」として捉えている[15]。

ピーターセンは，日系アメリカ人の集団的な連帯性を日本文化の特徴として捉え，それが第二次構造的要因（例えば，制度的な差別）による機能的な必要性の結果であったという側面を十分考慮していない。しかし，ピーターセンが，公的領域における適応状況と私的領域における適応状況が必ずしも整合的ではないということを指摘した点は評価されよう。

W. コーディルは「日本文化とアメリカの中流階級の白人文化は，礼儀正しさ，権威や親の願望を尊重する点，共同体に対する義務感，勤勉さ，清潔さ，個人による長期的な目標の達成の強調，制裁を受けない行動に対する（罪というより）恥，体裁を繕うことの重要性等において共通点がある」と述べ，さらに，日本文化がもっている「状況に敏感で感情，特に攻撃性を抑える」という心理的な適応のメカニズムによって，白人の雇用者からも同僚からも好ましい評価を得，職場に適応したと主張している[16]。

これに対して，H. キタノは，日本的価値の特徴ではなく，「適応機能性」に着目している。キタノはコーディルを批判し，日系アメリカ人が現在の「成功」を成し遂げたのは，日本的価値と白人中流階級の価値が類似しているからというよりも，日本的価値自体が「適応機能性」を有していたからであると主張している。キタノは，日系アメリカ人のもつ文化が古典的プロテスタントの理想的な規範とされる成功への熱望と，日本的価値である

「敬従」,「同調」,および「妥協」等を合わせ持っていたため,コア社会の敵意を高めることなく,現在の地位を獲得することができたと述べている。キタノはこのように適応過程における日本的価値の機能を評価しながらも,日本的な規範的価値である「遠慮」によって導かれる一連の行為,「遠慮症候群 (enryo syndrome)」が,日系アメリカ人の適応に及ぼしたマイナスの影響も考慮した上で,日系アメリカ人の適応過程を検討してゆく必要があることを指摘している。キタノは,「遠慮症候群」は決してアメリカ人に理解されなかったが,その行動に現れた非攻撃性と高度の同調性は白人から高く評価されてきたと述べている。しかし,他方では,その犠牲は大きく,個人の潜在能力の発達を妨げてきたことにも言及している[17]。

これらの同化理論の視点から見た日系アメリカ人の適応過程の解釈は一面的な日本文化賞賛に陥る危険性のあるものが多く,他のマイノリティ・グループ(例えば,アフリカ系アメリカ人,メキシコ系アメリカ人等)の文化的劣性を主張する文化的イデオロギーにつながるという批判を受けてきた。P. タカギ[18]は,外国文化がアメリカの中産階級と類似していることによって「成功」を説明するといった姿勢は文化進化論的な発想であり,このような方向で研究,理論化を進めることは危険であると述べている。また,E・ボナキッチと J・モディルはこのような「成功」物語の視点を「自己賞賛的な文化的多元論」であるとして批判している[19]。

世代理論も日系アメリカ人のケースに適用されてきた。日系アメリカ人の研究において,日系人の歴史的な経験が世代によって大きく異なること[20],また日系アメリカ人の間で自集団を識別する表現として日常的に用いられていること[21]から「世代」が重要であることが指摘されている。世代理論にみられる移民の「世代」ごとの適応の特徴は日系アメリカ人のケースにもみられることが,いくつかの研究によって報告されている[22]。しかし,この理論は,白人系ヨーロッパ移民をモデルに構築されているため,日系アメリカ人に適用する際には,人種的可視性等の特徴を十分に考慮する必要があると思われる。

ボナキッチとモディルはミドルマン・マイノリティ理論を用いて,日系アメリカ人の適応過程を世代別に考察している。その結果,「文化理論」と「状況理論」が,戦前の日系人,一世や年輩の二世,あるいは教育レベルの低い二世にほぼ適用できるが,戦後の日系人,特に三世には当てはまらないと結論づけ,以下のように説明をおこなっている。一世は,集団志向,家族志向が強く,勤労や節約に価値を置く日本文化を持込んだこと,一時的滞在という状況にあったこと,また,コア社会の差別によってエスニック・コミュニティ内部で経済活動を行うことを余儀なくされたことによって,ミドルマン・マイノリティ状況に至った。しかし,この経済活動の基盤も第二次世界大戦の際の強制立ち退きによって崩壊した。第二次大戦後は,戦前の差別の体験などからエスニック・コミュニティを再建し,そこに留まって経済活動を行うことを好むごく一部の日系人を除いては,多くの日系人がエスニック・エコノミーを離れ,コア社会の経済構造のなかに組み込まれていった。そして,教育もこの過程を促進した[23]。

以上,日系アメリカ人の適応過程を既存の理論的枠組によって検討してきたわけであるが,いずれの理論によっても日系アメリカ人の適応は十分に説明されていないように思われる。同化理論の視点およびミドルマン・マイノリティ理論の視点の問題点は,適応は様々な制約を受けながらも,移民の意図を反映しているという側面を十分に考慮していないことである。しかし,同化理論から得られた示唆としては,コア社会の文化や構造への適応において日本文化が機能性をもっていた点があげられる。ミドルマン・マイノリティ理論の視点においては,日系人のミドルマン・マイノリティ的な適応は,日本文化の特徴(勤勉,同胞意識の強さ),日系人の置かれていた歴史的状況(滞在者)によってもたらされたという指摘が有意であろう。以上のような検討を踏まえ,日系アメリカ人のエスニシティと適応に対する理解を深化させるために,移民自身の意志によって選択される「ストラテジー」の観点を加え,以下でその分析枠組を考えていきたい。

4. 日系アメリカ人の適応をめぐる分析枠組

日系アメリカ人の適応をめぐる研究において,前節でみてきたように,同化理論とミドルマン・マイノリティ理論は,適応に関して前提を異にする視点として捉えられ,それぞれの立場から不毛な論争を繰り返してきたように思われる。前者はエスニシティの文化的,表出的な側面を,後者は経済的,手段的な側面を中心に捉えているため,両者ともエスニシティについて偏った解釈に陥る傾向があり,適応過程の理解が妨げられてきたと思われる。適応の分析において,エスニシティを様々な状況に応じて手段的にも,表出的にも変化するプロセスとして捉える必要があろう。

適応は単なる受動的なプロセスではなく，以下に定義するような「コンテクスト」，「エスニシティ」，「ストラテジー」によって規定され，また，逆にそれらを規定する相互作用的なプロセスとして捉えることができるであろう。ここで，「コンテクスト」を「移住先国のコア社会の経済的，政治的，社会的，文化的状況といった外的要因」と定義する。とりわけ重要なのは，制度的，個別的な差別や偏見の度合等，移民のコア社会への参加のあり方に影響を与える要因である。さらに，日米関係，日本のあり方等の「国際的な状況要因」も含めて考える。「エスニシティ」については，「出自社会の文化や価値観，人種的な特徴，移民が移住先国において歩んだ歴史の共有を基盤としたエスニック集団の成員間の連帯あるいはエスニック集団への観念的な帰属意識」として捉える。「ストラテジー」は「移民が目指す将来の生活像を実現させるための意図的な行動の選択，操作」と捉える。

そこで，以下，日系アメリカ人の適応過程を世代ごとに，歴史的に，考察したい[24]。

1) 一世の適応過程

一世を取り巻く「コンテクスト」としては，日本からの移民が開始された当時，アメリカは資本主義経済の発達によって小規模経営から大規模経営への転換期を迎え，農村部においても都市部においても，低廉な労働力を必要としていたという経済状況があげられる。特に，日本人移民の到着したカリフォルニアはゴールドラッシュ後の急速な発展途上にあり，多くの「適所」が存在していた。また，支那人排斥法（1882 年）によって安価な中国人労働力が途絶し，これに代わる労働力が必要とされていたこともあげられる。しかし，当時のアメリカ社会には，帰化権を自由白人に限定した帰化法（1870 年），カリフォルニアを含む西部の数州における「異人種間婚姻禁止法」等の法的差別があり，「黄金期カリフォルニアの息子たち」等の人種差別的な組織がある等，きわめて人種的偏見や人種意識のつよい社会的な土壌があった[25]。

一世の「エスニシティ」は日本文化，日本的な価値，人種的な特徴を基盤とした，エスニック集団や祖国日本への帰属意識であった。彼らの「エスニシティ」は，コア社会から受けた差別や偏見に対して，その成員の統合と，精神的な安定を図る表出的な機能をもっていた。同時に，それは経済的利害によって結びついた連帯であり，「頼し講」等の経済的な相互扶助，白人同業者から「適所」を守るための「日本人靴同盟会」（1892），農業労働者の賃上げや労働条件の改善を目指した「フレスノ労働協会」（1908 年）等の組織にみられるように，手段的な機能も果たしていた。

一世の「ストラテジー」は，初期には「錦衣帰郷」を目的としていたため，より多く蓄財を貯え，帰国することを目指す「滞在者（出稼ぎ労働者）ストラテジー」であった。定着期にはいると，一世の「ストラテジー」は農地所有者や小規模事業経営者を目指す「滞在者（小資本家）ストラテジー」へと移行し，次第に「永住者ストラテジー」も芽生えていった[26]。

一世の適応は，「コンテクスト」によって大きく制約されたものであった。アメリカ大陸に到着した日本人移民は人種・民族差別的な賃金制，コア社会の経済構造の底辺に組み込まれていった[27]。日本人移民が低廉な労働力を提供したことから，白人労働者の多くは失業の脅威を感じ，日本人労働者を排斥するようになった。その排斥は個人レベルのものから次第に労働組合等を巻き込み，「アジア人排斥協会」が結成される等，組織化されたものとなった。日本人移民はコア社会の底辺の労働者階級から出発したが，勤勉と節約によってある程度の資本を蓄え，また，エスニックな連帯によって相互扶助を行うことで，その階層を上昇移動しつつあった[28]。都市部では，排日の気運が高まっていたため，エスニック集団の成員を雇用者とした小規模な事業（ホテル，レストラン，床屋，雑貨店等）の経営へと「ストラテジー」を変更する者が増加した。このような一世の商業の発展に対して，排斥がおこなわれたが，エスニックな同盟や組合を結成し，これに対抗した。また，農村部でも，農業労働者から農業者（歩合耕作から現金借地，さらに農地所有者）へとストラテジーを修正し，定住への動きがみられた。このような日本人移民の地位向上の動きに対して，「帰化不能な外国人」の土地所有を禁止する外国人土地法（1913 年），第二次外国人土地法（1920 年）が制定されたが，エスニックな土地会社を組織する等の対策が講じられた。また，第二次世界大戦に向かって日米関係の悪化する中で，日露戦争以降は日本のあり方，日本の軍事力拡張への懸念が高まり，黄禍論が横行し，日本移民排斥の動きがサンフランシスコの東洋人学童の隔離（1906 年）等の行政レベルの差別となって現われた。さらに，1924 年排日移民法の制定によって，一世は「帰国者ストラテジー」か「永住者ストラテジー」かの選択をせまられた[29]。そして，第二次世界大戦に至っては，大統領令（1942 年）に基づき，西部三州の日系人は敵性外国人として強制収容所へ連行され，コア社会とは全く隔離された生活への適応を余儀なくされたのであっ

た。戦後には，二世を中心とした日系市民協会（JACL）の尽力で勝ち取られたウォルター・マッカラン法（1952年）によって，一世の帰化が可能となり，アメリカ市民として永住するに至った。

文化的・社会的な適応は以下の通りであった。制度的差別や偏見によってコア社会の成員となることを認められなかったため，エスニック・コミュニティが形成され，社会関係はエスニック集団の成員間に限られていた。新天地でコア社会の成員とはコミュニケーションが困難であるために移民がエスニック・コミュニティを形成し，エスニックな連帯をもつのは常であるが，一世の持ち込んだ日本文化（家族的連帯，集団の規範を強調する日本的価値，出身県への帰属意識等）はこの傾向を助長したと思われる。このようなエスニックな連帯に加えて，日本移民が文化的可視性を持っていたことも排日につながった。定着期に行われた「写真結婚」はコア社会の成員には奇異で非道徳的なものに思われ，偏見が強化された[30]。一世の準拠集団は家族，日系人コミュニティ，あるいは出自国日本であり，コア社会の言語を習得したり，その文化を積極的に取り入れることに消極的な姿勢につながり，その結果，文化変容は遅々としたものとなり，排日の気運を高めた。なかには，帰国の時のことを考え，二世に日本で教育を受けさせた一世もおり，日本語学校や家庭においても日本的な価値が教えられていたことも，コア社会の反感につながった[31]。また，初期には単身の出稼ぎ労働者が多かったため，一世はきわめて低い生活水準に甘んじ，また，賭博，売春等が横行したため，日本人は文化的に劣っていると解釈され，人種的・民族的偏見が助長された[32]。しかし，「永住者ストラテジー」が選択されるようになると，排日の気運を鎮静するために，日系人が「同化可能な」エスニック集団であることをコア社会の成員に提示していこうという動きが起こり，アメリカ式の衣服，習慣等を取り入れる「外面的な同化」が推進され，なかにはコア社会の宗教や価値も取り入れて「内面的な同化」を目指す者もいた[33]。

2) 二世の適応過程

日本人の両親を持ちながらアメリカに生まれ育った二世はアメリカ国籍をもっていたため，その適応は一世とは大きく異なるものであった。また，戦前と戦後でも異なっている。二世にとって，最も重要な国際的「コンテクスト」としては，戦前の日米関係の悪化，特に第二次世界大戦があげられる。アメリカ・コア社会の「コンテクスト」としては，大戦下の強制収容所への強制退去，日系アメリカ人の徴兵制からの無条件の除外といった法的差別があげられる。戦後は，住居や公共施設使用に関する法的差別，異種族間結婚の法的な禁止などの制度化された差別は撤回された。しかしながら，ほとんどの社交クラブ，カントリー・クラブ，フラタニティ，ソロリティ等の私的な組織は事実上日系人に開放されていなかった[34]。1950 年頃から，二世部隊の活躍によってコア社会の日系アメリカ人に対する偏見は和らぎ，プラスのステレオタイプがみられるようになった。

二世において，「エスニシティ」は家族や日系コミュニティから学んだ日本文化，日本的な価値，人種的特徴を基盤とし，政治的・経済的利害によって結びついた手段的な連帯でもあった。しかし，帰属意識という点では日系コミュニティとコア社会を準拠集団としており，非常に複雑であった。二世は人種差別や排日といった「コンテクスト」において第一次的な人間関係は日系コミュニティに限定されていたが，エスニック・コミュニティとコア社会との間を日常的に移動していたため，「日本人」としての「エスニシティ」を意識化せざるをえない状況にあった。にもかかわらず，日米関係の悪化から第二次世界大戦という非常事態において，自らの持つアメリカ国籍，国家への帰属を強調し，アメリカ国民としての自己提示をおこなった。これは，国家としてのアメリカへの帰属意識はエスニック・コミュニティへの帰属意識の消失を意味するものではなかった。

二世の「ストラテジー」は「成員ストラテジー」であり，基本的にはコア社会の価値を受け入れ，積極的に自らをコア社会のなかに位置づけてゆこうとするものであった。

二世の適応の特徴はアメリカ生まれであること，一世が教育を重視したことによって，戦前においても，教育の領域では比較的コア社会に統合されていたことであろう。しかし，戦前には，たとえ学歴をもっていても人種差別によって，コア社会において職業に就くことができず，コア社会の経済階層を上昇することは不可能に近かった。専門（医者，法律家，会計士など）の教育を受けた者の中にさえ，日系コミュニティにおいても専門職に就けず，自営業を継いだりする者もいた[35]。

二世の場合，アメリカ国籍をもっており，差別や偏見を甘受しながらもアメリカ社会に永住し，成員として生きていくという「成員」ストラテジーをもっていたことが，その適応を大きく規定したと考えられる。東洋人排斥，排日の気運の高まりに対して，戦前においても，二世は人種的な差別に抗議し，アメリカに忠誠な市民であ

ることを声明する意図をもって，「米国忠誠協会」を結成し，これが後に JACL へと発展していった。JACL はそのネットワークを親日米人にまで広げ，いくつかの排日法案を阻止する等，政治的機能も果していた。排日の気運は時とともに静まるどころか，第一次大戦によってアメリカのナショナリズムは一層高揚し，「100% アメリカニズム」(「アメリカニゼイション」) 運動が展開され，激化していった。このような「コンテクスト」に応じて，多くの二世が日本国籍を放棄し，アメリカ国籍を選択した。このように，自らがアメリカ市民であることを強調し，アメリカへのアイデンティティを明示することは，二世がアメリカ社会で生き残っていくために選択した行動であったといえるであろう。

第二次世界大戦に際しては，相手国を祖国に持つ移民に圧力が加えられていった。他のエスニック集団には例をみないことであるが，カリフォルニア，オレゴン，ワシントンの三州に居住していた日系人はアメリカ国籍をもった二世も含めて，強制立ち退きを余儀なくされた。その多くは強制収容所に隔離されたため，コア社会とは切り離された生活を強いられた。このようなコア社会の強制立ち退き政策に対して，JACL はむしろ協力的であった。強制収容所に隔離された後も，JACL は対米忠誠運動を展開し，大統領に二世の徴兵義務を復活させるように請願したのである。アメリカのために戦うことが終局的には日系人を強制収容所から解放し，他のアメリカ人と同じ権利を回復させる最善の道であるというのが当時 JACL のリーダー，マイク・マサオカの信条であった。この請願は受理され，二世の志願兵によって第 442 大隊（アメリカ本土の二世中心）と第 100 大隊（ハワイの二世）が構成された。しかし，このような非常時に際して，日系人のあり方は一様ではなく，JACL をリーダーとした穏健派と，帰米組をリーダーとした日本帝国主義を支持する過激派の対立がみられる等，様々な「ストラテジー」，「エスニシティ」の葛藤があったことに留意しなければならない。

戦後，第二次世界大戦における二世部隊の活躍がアメリカへの忠誠心の証として認められ，日系アメリカ人全体がコア社会から信頼を得たことによって，コア社会のなかで「モデル・マイノリティ」としての地位を獲得した。法的な差別が廃止されたこと，また，強制立ち退きによって戦前に築き上げた経済基盤が崩壊したことによって，経済の領域においても，二世のコア社会への統合が進んだ。復員軍人の権利である G. I. ビルによって教育の機会を得たことも職業階層における上昇につながった。政治の領域においても，カリフォルニア州から Y. ミネタや R. T. マツイなどの議員が選出され，コア社会への政治参加もみられるようになった。コア社会の成員として認められた二世は，JACL のネットワークによって，新移民帰化法を成立させ (1952 年)，一世の市民権獲得に成功した。しかし，日系人がアメリカにおいて体験してきた被差別者としての歴史によって脳裏に焼き付いた差別への恐れから，雇用の際に差別されることの少ない職業を選択する二世が多いことにも留意しなければならない[33]。

二世の文化的適応は一様ではない。主流を占めているのは日本文化とアメリカ文化の両方に順応しているグループであるが，アメリカの生活様式に完全に同化すべきだと考えているグループ，帰米二世などにみられるように日本文化や価値を持ち続けているグループ，少数ではあるが，差別を忘れられず反米感情をもっているグループがみられることが指摘されている[37]。

3)　三世の適応過程

三世は一世，二世と異なり，「アメリカ人になることに努力を必要としなくてもすんだ世代」である[34]。三世にとって重要な国際的「コンテクスト」としては，ベトナム戦争でのアメリカの挫折，経済大国となった日本，日米貿易摩擦があげられる。アメリカ・コア社会の「コンテクスト」としては，法的な差別のみならず，社交クラブ等の私的な組織への制度的な差別がなくなったことがあげられる。日系アメリカ人に対する偏見やステレオタイプは存続しているが，戦前のように必ずしもマイナスのステレオタイプではなく，「勤勉」，「礼儀正しい」，「おとなしい」等のプラスのステレオタイプが増えた。その社会的な背景としては，公民権運動，ベトナム反戦運動等が繰り広げられ，従来のアメリカ的生活様式や社会秩序を揺るがす気運がもりあがっていたことがあげられる。

三世の「エスニシティ」は多様である。重要な基盤としては人種的な特徴，アメリカにおける日系人の歴史，民族的遺産としての日本の伝統文化があげられる。エスニシティは日常生活において機能する手段的・表出的連帯から，エスニック集団や文化への観念的な帰属意識へと変化してきたように思われる。しかし，強制立ち退きという日系人の歴史，根強い偏見やステレオタイプは，三世においてもエスニックな連帯に手段的な機能を与えている。この例としては，JACL の活動があげられる。テレビ等のマス・コミにおいて，東洋人はしばしばコミカルに描かれ，偏見を創り出しているとの指摘もあり，

JACL はマス・コミの描くステレオタイプが妥当でない場合，テレビ局等に抗議を申し入れる等，ステレオタイプや偏見の除去のために活動を行っている[39]。また，1970 年に JACL 大会で政府に対する強制立ち退き損害補償請求が取り上げられ，JACL 内部の意見が対立したが，若い三世の指導者層を中心とした活動の結果，1988 年にこの損害補償が実現したのであった[40]。

JACL の他にも，三世の「エスニシティ」は様々な活動に反映されている。公民権運動やベトナム反戦運動等によって従来のアメリカの WASP 優位の価値観，秩序が揺らぎ始めたことを背景に，コア社会の人種差別や偏見に抗議し，「エスニシティ」の枠に留まらず，アジア人の人種的連帯によるイエロー・パワー運動やイエロー・ブラザーフッド運動を展開するラディカルな三世も現われた。また，地道な日系コミュニティ（めぐまれない一人暮しの一世への奉仕活動等）への社会奉仕活動を通してエスニック・コミュニティとの関わりをもつ三世もいる。被差別者としての日系人史も三世のエスニシティのあり方に影響を与えている。強制収容所へ送られる前のレセプション・センターのあったマンザナーには三世の募金によって慰霊塔が建てられ，「巡礼」が行われている[41]。エスニック文化に一切関心を持たない三世もいれば，日本人町を中心とした日系コミュニティの活動に参加し，日本文化の象徴的な部分ともいえる伝統的行事や芸術の活性化に情熱を傾ける三世もいる。江渕はこのような三世の日本文化への関心を単に伝統的な日本文化への回帰ではなく，「日系アメリカ文化」の創造として捉える必要があることを指摘している[42]。

三世のストラテジーは「正員ストラテジー」であり，コア社会の正員として社会階層のより高い地位に自らを位置づけようとするものであった。それは，二世の築いた「モデル・マイノリティ」の構成員としての地位には飽きたりず，おとなしい成員から平等の権利のもとに自己を主張する「正員」としてのストラテジーである。

三世の適応の特徴は制度的な差別がなくなったことによって，コア社会の経済に組み込まれ，職業階層においても上昇がみられ，管理職，専門職が増加していることである。この背景として，以前は閉鎖的であった分野，広告，演劇，マス・コミ等の職業にも就けるようになったこと，あるいは強制立ち退きによって経済的基盤としての日系コミュニティは崩壊しており，コア社会の経済に職を求める必要性があったことも指摘できるであろう。社会的にも偏見が和らぎ，多様な適応の状況がみられる。三世は日系人との交友をもたない者も多く，婚姻的同化も進んでいる。一方で，アジア系のフラタニティやソロリティを好む三世も多い[43]。しかし，日系人あるいはアジア人に対する人種的な偏見やステレオタイプは持続し，多くの三世が被差別的な経験をもっている[44]。また，教育や資格が重要とされる無難な職業を選択する三世が大半をしめていることも指摘されている[45]。

文化的な適応についていえば，三世の思考や行動様式のアメリカ化はめざましく，一世，二世との間に大きなギャップがみられる。一世や二世からみると，「三世」は「アメリカ人」であり，不適当な言動やその理由を説明するのに「三世」という語がしばしば使われている[46]。また，三世は，思考，行動様式の点では明らかに「アメリカ人」であるが，他方で，勤勉，教育，忍耐，家族やコミュニティの連帯等の一世，二世から伝承された価値を維持し，ハンセンの指摘する「エスニック・リバイバル」がみられるという研究報告がなされている[47]。

今日，日米経済摩擦が表面化し，日系アメリカ人の適応は新たな局面を迎えている。国際的な「コンテクスト」，日米関係はある意味で悪化しており，日系人に対する社会的な敵意が呼び覚まされてきている。日系企業の進出が経済的侵略として捉えられ，日本の捕鯨が批判され，日系アメリカ人は再び日米関係のはざまで揺れつつある。1978 年の JACL 大会では，マスメディアで「Jap」再びという語が頻繁に用いられ，反日感情，反日系アメリカ人感情が高まってきていることが問題とされ，1970 年代には「日系アメリカ人は日本人ではなく，アメリカ人である」というキャンペーンの是非が議論されていた[48]。1983 年には，経済不振に苦悩する自動車産業の中心地デトロイトで，中国系アメリカ人が日本人と間違えられて白人労働者に撲殺され，しかもきわめて軽い刑罰で拘留を免れたという象徴的な事件が起こっている。このような国際的な「コンテクスト」の変化は，今後の日系人の「エスニシティ」，「ストラテジー」，そして適応に影響を及ぼすであろう。

5. むすびにかえて

本論では，日系アメリカ人の研究に用いられてきた同化理論の視点，世代理論の視点及びミドルマン・マイノリティの視点を検討し，それらの批判を踏まえて，日系アメリカ人の適応に関する分析枠組を仮説的に提示した。さらに，その分析枠組を用いて，歴史的に，世代を追って，日系アメリカ人の適応の過程の再解釈を試みた。日系アメリカ人の適応は，同化理論の枠組で捉えられているような漸進的なアメリカ化へのプロセスではな

い。また，その文化的な適応は，人種的可視性を有しているため，世代理論が提示する枠組によっても捉えられない。特に日系三世のエスニシティのあり方を同化による安定を前提とした単なる民族的遺産への回帰として説明することはできない。さらに，ミドルマン・マイノリティ理論が指摘する要因，移民のもつ文化的特徴，移民の置かれていた状況，コア社会の特徴のみからも把握できない。日系アメリカ人の適応は，コンテクスト，エスニシティ，ストラテジーによって相互作用的に変化する過程として捉えなければならないであろう。換言すれば，日系アメリカ人の適応は，コア社会の文化を学習することによって文化変容が進行し，構造的な統合がおこる過程ではなく，コンテクストに制約されながらも，ストラテジーによって意図的に方向づけられ，エスニシティによっても規定される過程として捉えなければならない[49]。

最後に，「日系アメリカ人の成功物語」の意味も問い直されなければならないであろう。「成功物語」が賞賛を得たことの背景には，公民権運動やベトナム戦争によって従来の価値体系や秩序が崩壊し，苦悩するアメリカの姿があったのではないだろうか。「成功物語」は，「日本文化と WASP 文化の類似性や適合性」を強調することでかつての「成功」の神話に象徴される，「古き良きアメリカ」の伝統文化へのノスタルジアをそこに見い出そうとしたものとして捉えられるであろう。

本論は，日系アメリカ人の適応をめぐる分析枠組を試験的に論じたものである。今後，一次資料を詳細に検討し，日系アメリカ人の適応をめぐる分析枠組をさらに精緻化させていきたい。

注

1) Robert Park, Race and Cultrue, Glencoe, Illinois, Free Press, 1950, p. 150.
2) R. Park and H. Miller, New York, Harper Brothers, 1921, p. 265.
3) Park, op. cit., p. 209.
4) Ibid., cit., p. 228.
5) Milton Gordon, Assimilation in American Life, New York, Oxford University Press, 1964, pp. 68-71.
6) Fumiko Hosokawa, The Sanse: Social Interaction and Ethnic Identification among The Third Generation Japanese, San Francisco, R & E Research Associations, INC., 1978, pp. 3-4.
7) Marcus Hansen, "The Third Generation in America," Commentary, 14, 1952, pp. 491-503.
8) E. Bonacich and J. Modell, The Economic Basis of Ethnic Solidarity: Small Business in the Japanese American Community, Berkely, University of California Press, 1980, pp. 13-36.
9) これに対して，キタノは異なった角度からミドルマン・マイノリティの現象を捉え，その特徴として，文化様式やネットワークも含めた集団の可視性，ホスト文化の構造と対応，そのシステム内部の権力関係をあげている。キタノは，日系アメリカ人は非白人で，勤勉や節約といった価値，適度な上昇への期待，家族やコミュニティのシステムのような組織のネットワークという点で肉体的および文化的可視性をもっていること，集中的な偏見，不利益，ステレオタイプ，隔離の経験，上位集団と下位集団に挟まれた弱い位置に置かれている等の特徴をもっており，ミドルマン・マイノリティの条件をみたしてきたが，最近ではこのような状況も変化してきていると主張している。キタノが人種的，文化的可視性を考慮している点は重要である。Harry Kitano, "Japanese Americans: The Development of A middleman Minority" Pacific Historical Review 43, 1974, pp. 500-519.
10) Park, and Miller, op. cit., p. 180.
11) Park, op. cit., p. 251.
12) Ibid., p. 151.
13) Ibid., p. 209.
14) William Petersen, "Success Story: Japanese American Style," The New York Times, January 9, 1966, in Minority Responses: Comparative Views of Reactions to Surbordination, Minako Kurokawa, ed., New York, Random House, 1970, pp. 169-178.
15) W. Petersen, Japanese Americans: Oppression and Sucess, New York, Random House, 1971.
16) William Caudill, "Japanese American Personality and Acuulturation," Genetic Psychology Monographs, 45, 1952, pp. 3-102.
17) Harry Kitano, Japanese Americans: The Evolution of A Subcultre, Englewood Cliff, New Jersey, Preentice-Hall, 1976, pp. 124-126.
18) Paul Takagi, "The Myth of Assimilation in American Life," Amerasia Jouranl, 2, 1973, pp. 151-152.
19) E. Bonacich and J. Modell, op. cit., pp. 34-36.
20) Hosokawa, op. cit., p. 3.
21) Kitano, 1976, op. cit., p. 5.
22) John Connor, Acculturation and The Retention of An Ethnic Identity in Three Generations of Japanese Americans, San Francisco, R & E Research Associations, Inc., 1977.
———, Tradition and Change in Three Generations of Japanese Americans, Chicago, Nelson-Hall Inc., 1977.
Kitano 1976, op. cit.
Gene Levine and Colbert Rhodes, The Japanese American Community: A Three Generation

Study New York, Praeger, 1981.
Bonacich and Modeill, op. cit.

23) Bonacich and Modeill, op. cit.

24) 本稿における日系アメリカ人の考察にはハワイの日系人のケースはふくまれておらず，本土西部の日系アメリカ人のケースを中心としている。また，世代の分類については，1980 年代から強制収容所までの時期を一世時代，第二次世界大戦から戦後の数十年間を二世時代，1970 年代以降を三世時代として考察を進める。この世代の時代区分については以下の文献を参照されたい。
Harry Kitano and Roger Daniels, Asian Americans: Emerging Minorities, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice Hall, 1988, pp. 52-75.

25)「黄金期西部アメリカ生まれの息子たち」は結成時には歴史資料収集等の活動をおこなっていたが，1907 年以降東洋人排斥運動を展開した。

26) 日系コミュニティのリーダーやメディアが永住志向の芽生えにどのように関わっていたかについては，Ichioka の著書を参照されたい。
Yuji Ichioka, The Issei: The World of The First Generation Japanese Immigrants 1885-1924, New York, Free Press, 1988, pp. 146-175.

27) 1860 年から 1870 年代にかけては大陸横断鉄道の建設をはじめ，各分野で中国人労働者が雇用されていたが，支那人排斥法によって中国人労働者が途絶したため，日系人がこれに代わる労働力となった。日系人の従事していた労働は鉄道労働，鉱山労働，製材労働，農業労働，家内労働に大別されている。加藤新一編『米国日系人百年史—在米日系人発展紳士録』新日米新聞社，1961 年，104 頁および 249 頁。日本人労働者の賃金は，ワシントン州の製材所の白人労働者の日給が 2.60-3.50 ドルであったのに対し，日給 1.75-2.75 ドルであった。Joe Feagin, "Japanese Americans," in Racial and Ethnic Relations, Englewood Cliffs, New Jersey, Prentice-Hall, 1984, p. 336.

28) 都市部においてみられた小規模な事業には，切花植木業やグロサリー及び野菜果物業等の米人を相手とするものと，日本食料品を扱う食糧雑貨の小売商，日本の書籍を扱う書籍雑誌店等の日本人を相手とするもの，洗濯業，床屋，レストラン業やホテル業，靴工業等の両者を対象とするものがあった。このような一世の商業，特に白人をその対象としている商業の発展に対して，排斥の動きがみられた。その例をあげると以下の通りである。白人相手の商業としての靴工業は比較的早い時期にその隆盛をむかえていたが，1887 年前後に白人資本家から圧迫をうけた。また，白人工場経営者が秘密裡に工場を設け，日本人靴工を起用していたことに対し，白人職工組合による排斥運動が起こった。この排斥を期に，日系人経営の靴工場が設立され，1893 年には靴工同盟会を結成し，共同購買及び販売組合を組織した。また，白人を顧客とする洗濯業においても，1907 年頃から排斥が激化したが，日本人同業者は同盟を結成し，購買組合を組織して対抗した。以上については前掲書，74-81 頁を参照されたい。また，農村部における日系人の発展は，1902，3 年頃から土地購入者が続出し，1909 年にはカリフォルニア州において 2 万エイカーの土地が日本人の手にわたったことからもうかがえる。農業における一世の発展については，以下を参照されたい。加藤新一前掲書，30-32 頁。
Bonacich and Modeill, op. cit., pp. 58-63.

29) 排日移民法の制定を契機として，「帰国者ストラテジー」へと変更し，帰国した者も多数みられる一方で，滞在を選んだ者の多くはこの段階である程度「永住」を覚悟したと思われる。この「永住者ストラテジー」は第二次世界大戦での日本の敗戦によって決定的なものとなった。しかし，一世のストラテジーの変化は一様ではなく，複数のストラテジーが個人のなかで錯綜し，第二次世界大戦後にアメリカ国籍を獲得するまでは帰国と永住の間で揺れ動いていた場合も多かったと思われる。このような一世のストラテジーの変化の歴史的背景については，前掲書，16 頁を参照されたい。

30) Ichioka, op. cit., pp. 164-175.

31) Bonacich and Modeill, op. cit., pp. 142-151.

32) Ichioka, op. cit., pp. 146-150.

33) Ibid., pp. 176-196.

34) Harry Kitano and Roger Daniels, op. cit., pp. 52-75.

35) Ibid.

36) Ibid., 116-132 頁。

37) 鶴木　真，『日系アメリカ人』講談社，1976 年，164-210 頁。

38) トマス・K. タケシタ，猿谷要共著『大和魂と星条旗—日系アメリカ人の市民権闘争史』朝日新聞社，1988，217-219 頁。

39) 江渕一公「日系アメリカ人の民族的アイデンティティに関する一考察—カリフォルニア州サンノゼ日本人町における三世の行動の分析を中心として—」綾部恒雄編『アメリカ民族文化の研究—エスニシティとアイデンティティ—』1982 年，136-199 頁。

40) トマス・K. タケシタ，猿谷要前掲書，220-225 頁。

41) 鶴木　真，前掲書，164-210 頁。

42) 江渕一公，前掲書。

43) Harry Kitano and Roger Daniels, op. cit., pp. 52-75.

44) 江渕の前掲書によれば，36 名中 28 名の三世が「偏見に基づく侮蔑的言辞や差別を体験したことがある」と答えている。その多くは東洋人一般に関するステレオタイプで，「低い鼻」，「つり上がった眼」といったものである。

45) Harry Kitano and Roger Daniels, op. cit., pp. 52-75.

46) John Connor, op. cit.

47) Eric Woodrum, "An Assessment of Japanese American Assimilation, plurarism, and subordination," American Journal of Socielogy, 87,

1981, pp. 157-169.
Conner 1977, op. cit.
Gene Levine and Colbert Rhodes, op. cit.

48) トマス・K. タケシタ，猿谷要前掲書，225-228 頁。

49) 参考文献としては以下のものがある。
前山　隆「ブラジルの日系人におけるアイデンティティーの変遷—特にストラテジーとの関連において—」, Latin American Studies, 4, 1983, The University of Tsukuba.
———,「適応の論理と心理—ブラジル日系人の母国敗戦時の変動」，筑波大学歴史・人類学紀要 12 号，1984 年 3 月。
———,「ブラジル日系人におけるエスニシティーとアイデンティティー—認識的・政治的現象として—」，民族学研究 48 巻 4 号別冊，1984 年 3 月。